

～盛岡城復原を目指す、同時に残す形・意味を改めて問う～

平成28年地域政策研究センター（地域提案型・前期）採択課題

課題名：史跡盛岡城跡の歴史的建造物復原に向けて

研究代表者：総合政策学部 教授 倉原宗孝

課題提案者：盛岡市教育委員会歴史文化課 三浦陽一

研究メンバー：似内啓邦(盛岡市都市整備部公園みどり課) 神山仁(日本城郭史学会盛岡支部長)

技術キーワード：盛岡城 史跡 整備・保存・活用

▼研究の概要（背景・目標）

本研究の究極の目的は、盛岡市の強いシンボルの一つで盛岡城の復原に向けて有効となる資料・情報を発掘することである。これはこれまでの経緯からも非常に難しい目的となるが、今回は有効な手掛かりの一つと想定されるロングフェローハウス(ボストン)での所在について探った。また難しい課題である資料発掘と同時に、今後の歴史的復元というテーマと共に市民に開かれ親しまれる史跡のあり方について調査、検討した。

▼盛岡城復原に向けた資料発掘（ロングフェローの残したもの）

本研究の究極の目的はお城復原のための根拠となる資料発掘である。その中でロングフェローが残した可能性のある写真発掘が今回の具体的なテーマの一つであった。結果から述べる。期待されたロングフェローによる写真は残念ながら確認出来なかった(あえて言えば「期待した写真は無い」ことが分かった)。ロングフェロー・ハウス(ボストン)に専門家・通訳を通じて所在の調査依頼がされたが、ハウスによる調査の結果、ロングフェローは「盛岡・岩手では写真は撮っていない(=盛岡城の写真は無い)」ことが知らされた。

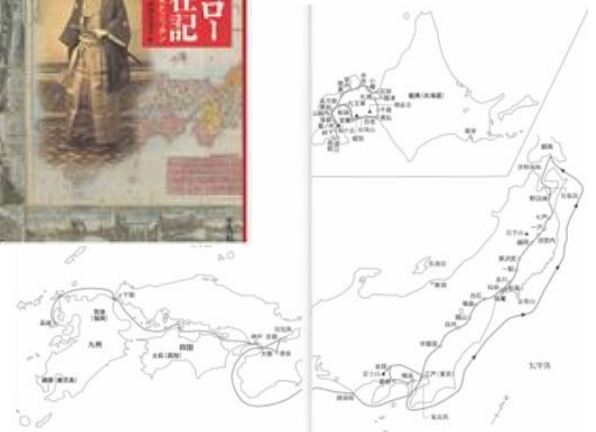
他の資料の可能性について、明治・昭和初期の物はオークションで処分されており(特に貴重品・調度品など)、それらの販売先は分かるが、古文書については「ひと山いくら」といった扱いで散逸して分からない状況にある。過去にも悉皆調査が行われたが見あたらず、県図書館及び中央図書館についても見つからない現状がある。結果として、写真をはじめとする復原のための資料情報集めは今後への期待を込めた課題として残った。

ところで今回注目となった米国人、チャールズ・A・ロングフェローは明治4年5月に横浜港に到着(当時27歳)以降、およそ1年8ヶ月にわたり維新後の日本に滞在し、国内各地を巡り独自の視点から写真や記録など興味深い当時の情報を残している。彼は北海道に渡った帰路、盛岡にも立ち寄っている(明治4年10月19日)。その為、当時の盛岡城の写真が存在するのではという期待があったが、彼が残した当時の盛岡の様子をもとに想像力を羽ばた

かす事も必要である。例えば、『日本滞在記』には、「10月19日(木)・・・城は南部藩藩主の館である。・・・垣根を通過して大きい松の木の並ぶ間を抜けて城の前提を横切り、途中鉄や銅で補強された重々しい扉をくぐると、間もなく城の中庭に立っていた。防壁は非常によい状態であった。二面の壁は大きく切った石で出来た高さ約50フィートの石垣で、上に銃眼の開いた胸しようがあり、的が来襲すると木製の講師から矢が降り注ぐようになっている。全体が広い面積を占め不規則な形をしていて、火薬の時代になるまではほぼ無敵であったと思われる。・・・」など、盛岡城の様子が分かると共に、現存する盛岡城に佇むイメージが触発される。



チャールズ・A・ロングフェロー著、山田久美子訳、ロングフェロー日本滞在記、平凡社、2004より



▼歴史的意味・価値を維持した市民に開かれた空間へ

市民にとって親しまれ有効な史跡空間にしていくことをにらみ、全国事例視察も行った。史跡保存については時代の中で捉え方が変遷している。お城の象徴ともされる天守閣については昭和30年代以降、町のシンボルとして鉄筋コンクリートによる復原が全国的に展開されたが、「真に意味有る復原とはなにか」もあらためて問われている。幾つか紹介しておく。



小田原城: 歴史性・市民性等の点で小田原城は注目される。復原に際し歴史文化財として丹念な調査が現在も進められているのと同時に、市民が丸となって復原とまちづくりを盛り上げようとする機運も感じる。ボランティアの方々の気配りも光る。



福岡城: 天守閣の復原を目指す盛岡城と比較して、福岡城の場合は天守閣のみが残っている史跡である。天守閣部分には見晴台が整備されており、そこから町を眺めることが当時の人々(城主)の立場・思いを喚起させるようで興味深い。



大阪城: 観光客の数は群を抜く(大河ドラマの影響もあるかもしれない)。周辺の複数の駅からのアクセス、関連施設等なお城を中心に周辺が一体的に整備されている。街から見える様子もシンボリックだ。リアフリーへの配慮も本格的である。

おわりに（今後の期待と課題） 今回残念ながら復原に直接貢献する資料発見には至っていないが、悲観されるものではなく、今後への期待を孕む課題となる。同時に盛岡城の今後の保存・活用には、手段・技術のみではなく、保存のあり方、意味・価値まで含めた議論がさらに必要であろう。資料収集と共に引き続き取り組みたい。